

久しぶりに銀座を歩いた。

銀座といえば高級で大人のイメージがつきまとう、かつては自分もそうだった。

有楽町で映画を観る程度で、街を楽しむほどの余裕はなかった。

ここで、有楽町？銀座？と思った方は、是非、地図で調べていただきたい。

この感覚がいわゆる、「土地勘」かもしれないからだ。

有楽町の隣が銀座なので、正確には同じではない、しかし、有楽町から歓楽街に向かうと、自然と銀座に入る。だから、「銀座を歩く」と「有楽町を歩く」とは、ほぼ同じ意味であり、有楽町よりも銀座のほうが、全国的にわかりやすいので、

銀座と、ついつい言ってしまう。

話は戻り、銀座のイメージの話。

かつては、そのイメージのあまり、自分とは無縁だと感じていた。

しかし、駅前の東京交通会館の入口で物産展がやっている。そこに見覚えのある緑色の山のキャラクターが…

「あっ、山形だ」

有楽町の駅前で山形から出店しているなんて。。不思議な気分だった。

きっと、昔から全国の地方から集まり、東京のど真ん中で、物産展はあったのかもしれない。

けれども、まったく気にもとめなかった。いや、気にとまらなかった。

それは、銀座とは都会の象徴であり、東京の象徴であり、華やかさの象徴であったから、そうでないものは目に入ってこなかったのだろう。

しかし、山形で暮らしている今、あらためて東京の中心地に来てみると、都会の象徴とは、全国の象徴的なもの集まり、選び抜かれた集合体だと実感するのだ。

そう思うと、通りに連なる高級ブランドショップも、細い路地をすり抜ける高級車も、高級スーツを身にまとい、すれ違う人も、急に、かつての距離を感じず、土地勘を得てきた。

山形のアンテナショップが銀座にあると聞き、はじめはいい気はしなかった。かつての高尚なイメージが崩されてしまうからだ。

しかし、それは銀座という場所が自分と距離があるように感じていたからだった。

今回、「銀座を歩く」ことにより、身近な存在が、そこに存在することで、自分にとっても身近になることを知った。

銀座、いわゆる「都会」というイメージが、地方とつながった出来事だった。

有楽町の中央口改札を出て、左側に細い路地がある。

そこには、ガード下の暗く、細長い路地に、赤提灯の居酒屋が並んでいる。

この空間が、銀座と同じ空間にあると認識した時に、東京の上書きされ続けた歴史を感じた。

その街のイメージやあり方を実感したものだ。みなさんも機会があれば、是非、行ってみてほしい。

